

憲法と映画(89)『オッペンハイマー』

核兵器の残酷さを世界へ

美賀多台 つだわたる



3時間を超える大作です。「原爆の父」と呼ばれる天才的物理学者のロバート・オッペンハイマーの生涯を描く伝記映画でした。

映画は、戦中の原爆開発を進める時期と、戦後に彼がスパイとして査問される時期を交錯するように作られ、しかも関係する人が大変多いために、ちょっとわかりにくくなっています。

第2次世界大戦、ナチスドイツが欧州を席卷していた時期、彼らが原爆をつくろうとしていることを察知した米国は、なんとしてもナチスよりも早く原爆開発しようと1942年マンハッタン計画を押し進めました。

その科学者のリーダーとしてオッペンハイマーが選ばれます。彼は理論物理学の研究者として高い評価を得ていましたが、米国共

産党の集会に出るなど左翼的な思想の持ち主です。それは承知の人選でした。

オッペンハイマーは、43年にニューメキシコ州の荒野ロスアラモスに巨大な町を造り、研究所を創立します。米国や連合国から優秀な科学者を集めて開発を押し進めました。

1945年5月にドイツが降伏したのち、7月にトリニティ実験を行い、その完成を確認しました。

原爆は広島、長崎に投下され、オッペンハイマーは「原爆の父」と褒めたたえられます。しかし彼は「私の手は血塗られている」とトルーマン大統領に訴え、戦後は水爆開発に反対する行動にでました。

そしてオッペンハイマーはスパイの容疑で査問にかけられます。彼の目の前で、近しい人々がさまざまな証言をしていきました。

核兵器廃絶をもっと強く

米国アカデミー賞を初め、世界の映画賞を受賞しているように、傑作映画です。オッペンハイマーの人柄の描写や人生の毀誉褒貶、米国政治の汚点である赤狩りの本質にも迫っていました。

しかし現在の核兵器廃絶の運動を、米国世論や世界各国に強く訴え、核保有国の国民感情や情勢を変えるものか、と言えば「弱い」と思いました。

原爆の威力を、その実験風景によって描き、オッペンハイマー自身や科学者の言葉で、恐ろしさを表現しています。しかし映像がありません。人間の上で爆発させた悲惨な現実、広島長崎の街や被爆者の姿を見せません。

「原爆は戦争を終わらせ、米兵の命を救った」と信じている多くの米国民には、これが限界かもしれません。映画は少なくともそれは否定しています。

しかし世界で上映される映画に、日本人の多くが知っている被爆者の映像を出してほしい、と思いました。それがウクライナ、中東で高まっている核兵器使用の危機を防ぐ力になります。